

雨と猫といくつかの嘘

作・吉田小夏

【登場人物】

水野風太郎

清美（風太郎の母）

菜穂（風太郎の娘）　＋　沢子

鉄平（風太郎の息子）　＋　玉三郎（猫のタマ）

涼太（風太郎の父）　＋　泉谷

鮎子（風太郎の妻）　＋　遠藤

注…十で繋がれた役は、輪廻したかのように必ずひとり二役で演じられることとする。

【場所】

素に近いブラックボックスの劇場。

舞台エリアの中央に、メインの舞台となる空間がある。

古いアパートの一部屋を思わせる、抽象度の高い空間。

部屋といっても境目が曖昧で、畳と座卓以外はろくな壁もないが、奥にはひとつ、外界の雨の中へ続く門のように、扉の意味を持つ場所がある。俳優達は、この扉となる場所だけにとどまらず、中央の演劇エリア以外にも自由に行き来する。部屋の外でさす傘は、時空の乗り物のようにも見える。メインの舞台をぐるりと取り囲むように、第二の演技エリアとなる道のような部分がある。第二の演技エリアは、あるときは街の中の道となり、あるときは中央の部屋に続く次の間や便所や台所になる。またあるときは、俳優の控えの場所となったり、小道具置き場になったりと、変幻自在な空間である。劇場の中には、サラサラとした雨の気配がずっと立ちこめている。

注…★印、☆印、の台詞は同時に発語する。

①*①*①　　く水野風太郎の60才の誕生日

雨の音がしている。

風太郎が台所からお湯を入れたカップラーメンを持って現れる。新聞を探し座卓に座る。遠くに雷鳴。風太郎、窓により、雨空を見る。席に戻り、カップの蓋をはがしとる。カップめんを感動無く啜る風太郎、新聞を広げながら、もう一度窓の外の雨を見る。

やがて、雨音に混じり、ドアをたたく音。風太郎、少し反応するが、無視する。すると、また激しくドアをたたく音。

風太郎　　・・・。

風太郎、アパートのドアを開ける。と、女が立っている。

風太郎　　はい・・・。

清美　　ただいま。(にっこり笑って) 久しぶりだね。

風太郎　　・・・。

清美　　元気だった？

風太郎　　あの、どちら様ですか？

清美　　ヤダ、何言ってるの？

風太郎　　え？

清美　　風太郎。お誕生日、おめでとう。

風太郎　　・・・。

清美　　暇なのねえ。せっかくのお休みなのに。

風太郎　　何なんですか、アナタ？

清美　　何って、私、風太郎ちゃんのお母さんじゃないの。

風太郎　　・・・。

清美　　ねえ、あなたが生まれた晩もね、こんな風に、どしやぶりの雨だったでしょう？覚えてる？ちょうど、台風の季節で・・・。

風太郎　　あの、

清美　　今年もまた、雨なのね。

風太郎　　母は、随分前に他界しておりますが。

清美　　(にっこり笑って) 今日はね、あなたに渡すものがあつて来たのよ・・・。

清美、紙袋からガサゴソとプレゼントの包みを取り出す。

清美　　これ、あなたにと思って。お母さん、一生懸命探したのよ。欲しいって言ってたでしょう？

風太郎　　え。(微かに)

清美　　ね？ずー・・・っと、欲しかったんでしよう？お母さんね、ちゃんと知ってたのよ、ホラ。

風太郎 ……

風太郎、怖くなりドアを閉める。

清美 (声) 風太郎？風太郎！

風太郎 ……

ドアの外で何度もノックする音がするが、やがて消える。

①*②*①

風太郎 ……

風太郎、ラーメンに戻ろうとするが、何か気になってしまい、もう一度、そうつとドアのそばにゆき、ドアに耳を寄せ外の音を伺う。雨の音が膨らんでゆき、溢れだし、耳に流れ込む。と、その音に併せて、降って沸いたように菜穂と泉谷が現れる…。菜穂はワンピース姿、泉谷は小奇麗なシャツをきている。泉谷はハシカチで、濡れた髪や首筋を拭いている。菜穂は座卓を布巾でふいたりしながら。

菜穂 (笑いながら) ええ？何、それ？

風太郎 いや、何って言われても。

菜穂 しっかりしてよ？お父さん、だまされやすいんだからさ。

風太郎 まあ・・うん。

菜穂 なんかさ、宗教とかの勧誘の人だったんじゃないの？(座卓を拭

き)

泉谷 あゝ。

菜穂 ねえ？「お母さん」っていうのが、怪しいよね。

泉谷 あゝ。

菜穂 ねえ、それより塩分！(ラーメンの容器を、お盆に移しながら)

風太郎 え？

菜穂 塩分とりすぎ！こんなの食べて。

風太郎 ハイハイ。(風太郎、座卓に戻る)

菜穂 もう、若くないんだからさ。

風太郎 わかってるよ。

菜穂 あ！こないだニュースでやってたかも。なんか、一人暮らしのお年寄りを狙ってね、家まで来てね、タツカイ健康食品を売りつけるんだって。

泉谷 あゝ、怖いですよ。最近、悪い人が多いから。

菜穂 気をつけてよ、ホント。

風太郎 ハイハイ。

①*②*③

菜穂、盆を持って部屋からでる。

泉谷 あ、

風太郎 え。
泉谷 あのう、それ、あけてみたらどうですか？（紙袋の方を見て）
風太郎 え？
泉谷 せっかくだし。
風太郎 ああ、うん、まあ、後でゆっくり・・・。
泉谷 菜穂さん、なんか一生懸命選んでみたいですよ。
風太郎 まあ、もうめでたくもなんともないんだけどね、ここまできると。
泉谷 そんなこと、ありませんよ。
風太郎 なんだか、生き延びてしまっただけ。
泉谷 そんな言い方しないでくださいよ。
風太郎 まあ、おかげさまで。
泉谷 まだまだこれからじゃないですか。
風太郎 そうね。そうかな？
泉谷 これからですよ。
風太郎 今までは、ダメだったしね。
泉谷 ちよっ！そういう意味じゃないですよ・・・。
風太郎 あいつ、なんか言ってるやない？
泉谷 え？
風太郎 俺の悪口とか。
泉谷 言ってるよ、別に。
風太郎 うん・・・。
泉谷 言ってるよ、だって、ホラ、今日だってこうやって、ねえ？
風太郎 まあ、うん・・・。
泉谷 もう、お父さんっ！
風太郎 こんな、何年ぶりだろう。
泉谷 え？
風太郎 なんだかね。わざわざ会いに来るなんて、なんか、悪い知らせでもあるのかな？
泉谷 またまた、そんな。
風太郎 菜穂にはね、色々と、離婚のことで迷惑をかけちゃったから。
泉谷 ・・・。
風太郎 まあ、君も聞いているかもしれないけど。
泉谷 いや、別に、僕は。
風太郎 これ、爆弾かなんかじゃないの？
泉谷 ちよっ、えええ？
風太郎 いや、それは冗談だけどさ。ははっ。

①*②*③

菜穂、お茶の乗った盆を持って戻る。

菜穂 ねえ、それ夢だったんじゃないの？

風太郎 え？

菜穂 さっきの、悪い人の話。

泉谷 ああ。

菜穂 昼寝してて、夢でも見たんじゃないの？はい。

泉谷 ありがとう。

風太郎 いや、そんな……。あ、泉谷さんは、お茶で良かったですか？

泉谷 え？

風太郎 カフェラッテとかじゃなくて。

菜穂 なんて、カフェラテなのよ。ラッテ、ラテ？

泉谷 いや、ボクはもう、なんでも。

風太郎 ホント、何にもなくて。

泉谷 どうなったんですか？そのあと。

風太郎 え？

泉谷 その人に、悪い人に、「お母さんよ」って言われて。

風太郎 ああ、いや、それが、その後が、よく思い出せないんだけど……。

菜穂 だってお父さんさ、家でもよくうたた寝してたじゃない。もう、

どこでも寝られるのよ、この人は。

へえ。

泉谷 そんなことないよ。

菜穂 嘘。うちの弟の結婚式の時もね、ずっと寝てたんだから。

泉谷 え？結婚式って、鉄平君の？

菜穂 花束贈呈の前になって、やっと起きたの。

風太郎 寝てないよ。

菜穂 だってずっと、下向いてたじゃない。

風太郎 泣くのを我慢してたんだろう、それは。

泉谷 明日、鉄平君のところにもご挨拶に。

ああ。

菜穂 私達の時は、寝ないでよ？

風太郎 だから、寝ない、……寝てないよ。

泉谷 あのう、本当にありがとうございます。（しっかりと頭を下げる）

風太郎 え？

泉谷 お父さんには、もしかしたら来ていただけないんじゃないかって、心配してたんですよ。

菜穂 いいよ、余計なこと言わないで。

泉谷 いや、うん。

風太郎 お母さんは来るんだろ？

菜穂 そりゃ、来るけど。

風太郎 うん。

皆、間がもたず、茶を啜る。

泉谷 うん、さっぱりしてて旨いっ（お茶が）。ふふっ。

菜穂 ねえ、あれ直したら？

風太郎 ん？

菜穂 ピンポン。ドアの。鳴らなかつたでしょ、さつき。

風太郎 ああ。もう、ずっと鳴らないんだよ、アレ。

菜穂 人が来ても、よくわかんないじゃない。

風太郎 まあ、普段は、誰も来ないし。

菜穂 ・・。

泉谷 あの、これからはもう少し、僕たちも。

風太郎 いやいや、そういう意味じゃないんですよ。

菜穂 なんかさ、思い切って彼女とか作って見たら？

風太郎 馬鹿言ってるんじゃないよ、お前。

菜穂 えー？いいじゃない、ねえ？

泉谷 いや、いいと思いますよ、うん。

菜穂 お母さん、彼氏、できたみたいだよ。

泉谷 ええっ！

菜穂 アンタが驚いてどうすんのよ。

泉谷 いや、だって。

風太郎 ・・そう。

菜穂 まあ、結婚式で顔あわせちゃうしさ。先に言っところかな、と思
って。

風太郎 そう・・あの人は、なかなか美人だからね。

泉谷 いや、お父さんだって、あれですよ、こう・・ハイ。

菜穂 何よ。

泉谷 いや、だからさ。五十、六十、ハナチャレ小僧っていうじゃない。

菜穂 は？

泉谷 若いってことだよ。ねえ？（風太郎に）

風太郎 泉谷さん。

泉谷 はい！

風太郎 菜穂のこと、未永くよろっ、よろよろ、よろしくお願いいたしま

す。

泉谷 え？いや、それは、ハイ。もちろん。

風太郎、よろよると立ち上がる。

泉谷 え、どこ行くんですか？

風太郎 ちよっと、便所に。

風太郎、退場

①*②*④

泉谷 ・・。

菜穂 氣い、使いすぎ。

泉谷 え？

菜穂 氣い使いすぎだつてば。逆におかしいつて。

泉谷 ああ、うん。なんか、まだ慣れなくて。

菜穂 お父さん戻ったら、そろそろ行こうか？

泉谷 え？来たばかりじゃない。

菜穂 いいよもう、顔は見せたんだし。

泉谷 でも。

菜穂 雨もひどいし。まあ、あんまり居てもね。

泉谷 あのさ。

菜穂 何？

泉谷 一度、病院、連れて行った方がいいんじゃないかな？

菜穂 え、お父さん？

泉谷 結構、ヤバイと思う。

菜穂 何？

泉谷 被害妄想。かなり、ヒドイよ。

菜穂 性格でしょ、それは。

泉谷 いや、鬱病とかの兆候かもしれないしさ。

菜穂 そうかなあ？

泉谷 環境が良くないんじゃない？こういう、狭いアパートとか。

菜穂 はあ。

泉谷 危ないんだよ？中高年の鬱っていうのは。

菜穂 それは知ってるけどさ。

泉谷 けど、何？

菜穂 しかたないじゃない。お父さん達が、決めたことなんだから。

泉谷 しかたないってことはないだろう？

菜穂 何？じゃあ私達のトコに呼ぶわけ、お父さんを？

泉谷 それは・・、あれだけどさ。

菜穂 お父さんだって、やりにくいでしょそんな・・・。

泉谷 いや、ただなんとなくさ、気になったから。

菜穂 そりゃ、まあ・・・。

泉谷 何買ったの？これ。(プレゼントを)

菜穂 え？ああ、オカキ。

泉谷 オカキ？

菜穂 お父さん好きなのよ、オカキとか、塩せんべいとか。

泉谷 なんで、オカキなんだよ！

菜穂 塩せんべいの方が良かったかな？

泉谷 違うよ、還暦のお祝いだろ？

菜穂 うん、まあ。

泉谷 普通はもつと豪華にするだろう？それに赤くないだろう、オカキは。

菜穂 いいじゃない、モノが増えるより、食べ物の方が。

泉谷 なんで、お前そうやってさあ・・・。

菜穂 え？

泉谷 オレ言っちゃったよ？「菜穂さん、一生懸命選んでましたよ」って。

菜穂 ちゃんと選んだわよ、デパートで。

泉谷 せめて、赤いものにしろよ。

菜穂 何、赤いオカキってこと？

泉谷 オカキじゃないにしてもさ。

菜穂 とうがらし味とか？

泉谷 とにかく赤いのが大事なんだよ！

菜穂 なんで？

泉谷 え？だから、それはだから、赤ちゃんに戻るからだろう？

菜穂 は？

泉谷 還暦になると、子供に戻るって言うだろう？赤ちゃんの赤だよ。

菜穂 ホントに？

泉谷 ホントだよ。たぶん。

風太郎、小皿に小さなオカキを3つだけ載せたものをもって登場。

泉谷 あれ、あ・・・すみませんなんだか。

風太郎 お茶菓子もださずに悪かったね。

菜穂 え、何これ？

風太郎 いや、ちよつと事情があつて、オカキがもうこれしかなくて。

泉谷 ああ・・・。

風太郎 いち、に、さん、と。まあ、一応人数分。こんなのですみません
が。

泉谷 あ、いただきます。

風太郎と、泉谷、菜穂、おかきをポリポリと食べる。

菜穂 これ、飲んだらそろそろ行くね。

風太郎 ああ。そうか。

泉谷 うん、おいしいつ。

風太郎 塩分が多いから、ホントはあんまり食べちゃいけないだけどさ。

泉谷 ああ。

風太郎 なかなかやめられなくてね。

菜穂 まあ、オカキ位なら大丈夫でしょ。

風太郎 それがさ、こないだ久しぶりに医者に行ったら、ずいぶん怒られ
ちゃってね。こういうの、意外と馬鹿にならないんだって。思い
切って、オカキをしばらく我慢しようと思ってるね。

泉谷 ああ。

風太郎 まあ、そんなわけで、最後の3粒。

泉谷 ああ、そんな貴重なものを。

風太郎 ・・そうだ、帰る前に、せっかくだから。

風太郎、プレゼントの包みをあげようとして、包みの入った紙袋に手を伸ばす。

泉谷 あ。お父さん、ちよっ！ちよっ！と、待ってください。

風太郎 え？

泉谷 あの、あ。ケーキ！ケーキ、食べましたか、もう？

風太郎 いや。

泉谷 僕、買ってきますよ。お祝いに。

菜穂 何？どこで？

泉谷 駅前行けば、なんかあるだろう。食べましょう、皆で、ね。

風太郎 そんな、気を使わなくていいから。

泉谷 あと、赤いもの！なんか赤いもの、買ってきますから！ちゃんと、

お祝いしましょう。

菜穂 いいよ、そんな。

泉谷 すぐ、戻るって・・。

菜穂 ねえ。ちよっ。

泉谷 行ってきます！

泉谷、退場。

風太郎 いいの？

菜穂 え？

風太郎 急いでたんだろう？

菜穂 ああ、まあ、大丈夫。

風太郎 そうか。

少し、間。

菜穂 ごめんね、なんか。

風太郎 うん。・・・いや、結婚式の前に会えて、良かった。

菜穂 ・・・

風太郎 ケーキなんて、ずいぶん久しぶりだな。

菜穂 私も。

風太郎 好きだったろう？甘いの。

菜穂 ダイエット中だから。

風太郎 いいじゃないか、そのまま。

菜穂 ええ？だって、式に向けて綺麗にしとかないと。

風太郎 お母さんは元気？元気が、そりゃ。

菜穂 まあ。

風太郎 鉄平のところは、どうなの？

菜穂 元気みたいよ。赤ちゃん、たぶん女の子だって。

風太郎 そうか。

菜穂 ・・・お父さん。

風太郎 あ。これ、ありがとうね。

菜穂 あのそれ、オカキなの。

風太郎 ああ・・・そうか。

菜穂 ごめんね。いいよ、捨てて。

風太郎 いやいや。毎日、ひとつぶづつ食べようかな。(くつくつ笑いながら)。

菜穂 お茶、淹れなおそうか？

風太郎 ああ、そうね。淹れ直そう。

菜穂 ごめん、薄すぎたねこれ。お湯みたい。

風太郎 いや、そういう意味じゃ。

菜穂 いいよ、私するから。

菜穂、自分が立ってオカキの皿や湯のみをさげお茶を淹れなおそうと・・・。

菜穂 お茶っぱ、後少しだったよ・・・。

風太郎 ああ、そうだお茶っぱも切れちゃって。

菜穂 コーヒーか何か、ある？

風太郎 あったかなあ？

菜穂 ちよつと、見てみるね・・・。

菜穂、退場。風太郎、菜穂からもらったプレゼントの包みを、再び紙袋から取り出す。・・雨の音が強くなる。と、再びノックの音。明転。

風太郎　・・？

②*①*①　　〜風太郎の六才の誕生日

清美（声）　風太郎？いるの？開けてくれない？手がふさがっちゃって。

アパートのドアを開ける風太郎。清美が立っている。

手にはケーキの箱が入った袋と、買い物籠。

風太郎　・・。

清美　　ただいま。（にっこりと笑って）あ〜っ、それ見つけちゃったの？

風太郎　・・。

清美　　風太郎、お誕生日、おめでとう。

風太郎　・・ありがとう。

清美　　ホラ、ケーキ、買ってきたよ！すごいでしょ？

風太郎　　すごい！

風太郎の父の涼太が現れる。風呂上りで手ぬぐいで髪を拭いている。

手にはビール瓶とグラス。

涼太　　おう、お帰り。

清美　　ただいま・・。

涼太　　うん。

清美　　何、随分早かったのね？（ひどく喜んで）

涼太　　うん、まあ。

清美　　もう、雨、すごくてさ。

涼太　　台風来るって。

清美　　そう。

涼太　　なんか、つまみある？

清美　　あったかな？あ！お夕飯、お寿司頼んであるの。

涼太　　おお。豪華、豪華。

清美　　風太郎〜！今日は、お父さんも一緒に御飯だよ。

風太郎　　うん！

清美　　今日のお寿司はね、すごいだよ。「お稲荷さん」じゃないの。ちや

んと、お寿司屋さんが作ったヤツなのよ。

清美　　カップ巻きは？（不安げに）

清美　　カップも、入ってるわよっ！

風太郎　　やったっ！

涼太　　オイ、つまみ。

清美　　あ、うん。

涼太 カップ、カップ、カップ、カップ……！（楽しく手を打ちながら）

清美、ケーキの箱の袋と買い物籠を持って部屋から出る。そのまま台所へ。

②*①*②

風太郎 お父さん。

涼太 ん？

風太郎 これ、もう、開けてもいい？

涼太 お母さんが来てからにしたら？

風太郎 わかった。

涼太 きっと、風太郎の欲しかったものだよ。

風太郎 え？ホント？

涼太 おめでとうっ！（頭を強引にゴシゴシする）

風太郎 やめてよ、恥ずかしいから。

涼太 照れるな、照れるな。

風太郎 もう子供じゃないんだから、そういうのやめてくれる？

涼太 お、お前も大人になったか？コリヤコリヤ。（ズボンを下ろそうと

してじゃれる）

風太郎 やだっっ！やだっっ！やめてっつてばあっ！（照れて激しく抵抗す

る）

涼太 なんだよ、冷たいなあ。

風太郎 お父さん、

涼太 ん？

風太郎 おかえりなさい。

涼太 なんだ、急に。

風太郎 ううん、なんか、久しぶりみたいな気がしたから。

涼太 そうか？

風太郎 うん。

涼太 ・・。（取り合わず、ビールを飲みながら新聞を見ている）

風太郎 ねえ、ねえ。

涼太 何？

風太郎 お寿司のことなんだけど・・。

涼太 寿司がどうした。

風太郎 あのね、カップ巻きはお寿司じゃないの？

涼太 そんなことないぞ。

風太郎 あのね、学校でね、「カップ巻きは厳密には寿司じゃない」、って

言われた。

涼太 誰だそんなこというヤツは。

風太郎

上田君。

涼太

言わせとけ、言わせとけ。

風太郎

あのね、カップ巻きはね、あくまで口直しのポジションなんだって。

涼太

ナマイキな奴だな、上田は。

風太郎

でも上田君で、すごいんだよ。

涼太

頭いいのか？

風太郎

頭はフツウだけど、すごい大人っぽいパンツはいてるんだよ。

涼太

黒くて、ピタツとしたヤツ。

風太郎

新しいパンツが欲しかったら、お母さんに言いなさい。

涼太

そいでね、うちのクラスと、隣のクラスにひとりづつ彼女がいるんだよ。

涼太

そんな子と遊ぶんじゃないの。

風太郎

浮気は男の甲斐性なんだって。「男の甲斐性」って何？

涼太

・・そういうのは、学校の先生に聞きなさい。

②*①*③

清美戻る。盆の上には、風太郎のカップ、清美のグラス、オカキ小皿。

清美

なんか、オカキ位しかなくて。

涼太

なんだよ、しょうがないなあ。

清美

ごめん。

風太郎

オカキ、おいしいよ？

風太郎

風太郎、涼太にオカキをひとつ食べさせてあげる。涼太嬉しそうに食べる。

風太郎

美味しい？

涼太

涼太、にこにことうなずく。清美、涼太にビールを注いでもらいながら・・。

清美

風太郎、プレゼントあけてみたら？それともお食事の後にする？

涼太

お前を待ってたんだよ、なあ？

清美

ああ、ごめんなさい。

風太郎

あけていいの？

清美

いいわよ、あけてごらん。

風太郎

・・(にっこりとする)。

涼太

風太郎、つつみを不器用にあける。清美、涼太を促して、手拍子と共に歌いだす。

涼太・清美

ハッピーバースデイ・トウユー、ハッピーバースデイ・トウユー、ハッピーバースデイ・ディア風太郎・・。

風太郎

つつみがあくと、猫のぬいぐるみが出てくる。風太郎の様子がおかしく、清美は

風太郎

歌をやめる。涼太も途中でやめる。涼太、気を取り直して大きく拍手する。

風太郎

・・。

涼太 おめでとうっ！
風太郎 ・・。
清美 どうしたの？
風太郎 お母さん、ありがと。(寂しそう)
清美 猫が欲しいって言ってたでしょう？
風太郎 うん・・。
清美 どうしたの？気に入らないの？お母さん、一生懸命探したのよ？
風太郎 だって・・。
清美 はつきり言いなさい、男の子なんだからウジウジしないのっ。
涼太 そんな、キツク言うなよ。
清美 ちよっ、黙ってて。
風太郎 だって、だって、お母さん、小学校に上がったたら、猫飼ってもいいって言ったよ。
清美 え？そうだっけ？
風太郎 うん。
清美 無理よ。あなたちやんと世話できないでしょう？
風太郎 変だと思ったんだ。これ、すごく、軽いし、猫を包むなんて、そんなの、そんな、すごく、可哀想だから、だか、変だとは、思っただけど・・。(泣きそう)
清美 泣くんじやないの！！もう六才でしょう？！
風太郎 (耐える)
清美 泣いちゃダメっ！泣いたら、負けなんだよっ！！
風太郎 ・・。
涼太 ・・いいんじゃない？猫位飼っても？
清美 ダメよ。結局、私がゼンブ面倒みるんだから。
涼太 ちやんと、面倒みるよな？
風太郎 みる。
涼太 大丈夫だろ、猫の一匹や二匹。
清美 エサ代だって、馬鹿になんないんだし。
涼太 ちやんと渡すモンは渡してるだろう？
清美 あなたは、・・ふだん、家に居ないから言えるんでしよう？
涼太 おい、やめろよ。(風太郎を気にして)
清美 本当のことじゃない。
涼太 仕方ないだろう、それも仕事なんだから。
清美 そうね。ご苦労様です。
涼太 おい。

風太郎 ごめんなさい。やめて、喧嘩しないで。

清美 喧嘩なんてしてないでしょっ！

涼太 待て、待てって。

清美 何よ。

涼太 よし、今お父さんが、本物の猫、貰ってきてやるから。

風太郎 ホント！

清美 どこで？

涼太 ホラ、角の神社んトコに、なんか一杯いるだろう？いつも。

清美 それ、野良猫でしょう？

涼太 さっき、子猫がいたよ。白に黒いブチの、こう牛みたいな模様で。

風太郎 猫なのに牛なの？！

清美 いいよ、そんな。

涼太 待ってるよ、風太郎。（頭をゴシゴシする）

清美 ねえ。

風太郎 名前は、ウシがいい！

涼太 よし。すぐ、戻るって。

清美 ちよっ、ねえってば。

風太郎 いってらっしゃい！

涼太 おう！

涼太、退場。

清美 ・・行っちゃった。

風太郎 ・・ウシ。

清美 ウシなんて変でしょ。猫なんだから。

風太郎 ねえ、飼ってもいいでしょう？

清美 （鼻からため息を吐いて）ウシ、じゃなくてブチって名前にしたら？

風太郎 ブチ！（気に入った様子）

清美 ちゃんと、面倒みるのよ。

風太郎 みる。

清美 （少し微笑んで、ため息を吐き）すごい雨だね。

風太郎 ねえ、お母さん。

清美 ん？

風太郎 「浮気は男の甲斐性」って何？

清美 どうしたの急に？

風太郎 ううん、なんでもない。

清美 お母さん、わからないわ。男の人のことは、むずかしすぎて。

風太郎 そう。

清美 ・・お父さん、大丈夫かな？

風太郎 すぐ、帰ってくるよ。

清美 ねえ、あなたが生まれた晩もね、こんな風に、どしゃぶりの雨だったでしょう？覚えてる？覚えてるわけないわね・・。

風太郎 お母さん？

清美 ん？

風太郎 ぐあい、悪いの？

清美 え？どうして？

風太郎 なんとなく。

清美 雨の日ってね、ちよっと悲しくなりやすいものなのよ。・・さて、お寿司が来る前にお吸い物でも作るか・・(立ち上がり、座卓の上のものを盆に載せようと・・)。
お母さん。

風太郎

清美 ん？

風太郎 悲しくなんてないよ。だって、今日は、お誕生日なんだもん。

清美 (にっこりして) 風太郎、その子のことも大事にしてあげてね。

風太郎 うん、この子はね、ブチのお嫁さんにするの。

清美 そう。そうね。

風太郎 それでね、ふたりはね、いつまでも幸せに暮らすんだよ。

清美 ・・そうね(弱く微笑む)。ホラ、御飯の前に、ちゃんとお片付け

しなさい。

風太郎 はい。

清美、退場。 風太郎、プレゼントの包装紙をたたみ、袋にしまう。

猫のぬいぐるみをじいっと見て座卓の上に置く。 雨。

③*①*① 風太郎の60才の誕生日

菜穂 (声) ねえ? ・・ねえ、こんなのが出てきたんだけど・・。

菜穂、台所から出てくる。手には紅茶の缶。

菜穂 え?

風太郎 こっちは猫が出てきた。

菜穂 ヤダ、これ、鉄平の分! 赤ちゃんのお祝いの。

風太郎 ああ、そうだったのか。

菜穂 あく、ゴメン。今朝、バタバタしてたから・・。

風太郎 おかしいとは思ったんだけど。

菜穂 ねえ、このお茶、まだ、大丈夫かな?

風太郎 賞味期限は?

菜穂 書いてないみたい。

風太郎 そんなはずないだろう。

菜穂、風太郎に渡す。風太郎。缶の裏を見たりする。

菜穂 ・ ・ ・ どうした？

風太郎 ううん。

菜穂 ・ ・ ・

風太郎 お父さん。

菜穂 ン？

風太郎 困ってること、ない？

菜穂 まあ、だいぶ慣れてきたかな。

風太郎 ・ ・ ・

菜穂 すまないね。

風太郎 え？

菜穂 お前に、余計な心配をかけちゃって。

風太郎 いや。

菜穂 この辺は、静かでもいいところだよ。ここに住んでから、気が付いたこともある。

風太郎 何？

菜穂 こういう雨の日に、夜、ひとりで電気を消して寝ているとね、雨の音が、なんだか拍手みたいに聞こえてくるんだ。

風太郎 拍手？

菜穂 よく聞いてみると。いい音だ。

風太郎 ・ ・ ・

菜穂 あ、なんだ、ここにあるじゃない。

風太郎 え？

菜穂 ホラ、ここだよ。

風太郎 え？ああ・ ・ ・

菜穂 なんて書いてある？

風太郎 ンん・ ・ ・

菜穂 ③ ＊ ② ＊ ① ～ 風太郎の33才の誕生日 (菜穂6才)

アパートのドアが開く。風太郎の妻、鮎子が立っている。鮎子は身重。

手にはケーキの箱の袋と、買い物袋。

鮎子 ただいま。あら、早かったね。

風太郎 おかえり。

鮎子 急に、雨降ってきてさ。

菜穂 お母さん、おかえりなさい！

鮎子 奮発してケーキ、買っちゃった。ショートケーキ、苺の！

菜穂

鮎子

風太郎

菜穂

鮎子

風太郎

菜穂

鮎子

菜穂　ろうそくは？

鮎子　ちやんとあるわよ。

菜穂　やった！

鮎子 台所の方へ退場・・・。

風太郎　いいよ、ロウソクなんて恥ずかしいから（鮎子の方へ）。

菜穂　お父さん、ホラ、早くあけてよ。

風太郎　ああ。どれどれ・・・。

菜穂　お父さん、お誕生日、おめでとう。

紅茶の缶の蓋をあける。中にはびつしりとオカキ。

風太郎　・・・お。

菜穂　ジャーン！オカキだよ。好きでしょ？

風太郎　いや、びつくりした。

菜穂　あげる。プレゼント。

風太郎　ありがとう。

風太郎の父の涼太が現れる。手にはビール瓶とグラス。

涼太　・・・。

菜穂　おじいちゃん、見て！オカキだよ。

涼太　おお。すごいすごい。

鮎子、台布巾を持って戻る。菜穂、他の部屋に何かとりに行く。

鮎子　お父さん、もうビールですか？

涼太　なんか、つまみあったっけ？

鮎子　ええ？でも、もうすぐお夕飯なので。

涼太　メシ？

鮎子　お寿司、頼んであるんですよ。

涼太　おお。豪華、豪華。

風太郎　カッパ巻きは？

鮎子　はいってんじゃない？並にしたから。

菜穂、走って戻る。紙製の王冠を風太郎にかぶせる。自分も同じものを被っている。

風太郎　これ何？

菜穂　王様の冠だよ。菜穂が作ったの。

風太郎　そうか、すごいな。

菜穂　あげる。

風太郎　ありがとう。

菜穂　あのね、今日は、お父さんが王様なんだって。

風太郎　すごいな、それは。

菜穂　見て。菜穂とお揃いなんだよ。（涼太へ）

風太郎 ホラ、御飯の前に、お片付けしなさい。

菜穂 はーい。(猫のぬいぐるみを乱暴に持つて)

菜穂退場。風太郎の父の涼太、座って新聞を読みだす。虫眼鏡を使っている。

風太郎 ちよっと飲みすぎなんじゃないの？

涼太 大丈夫だよ、コレくらい。

風太郎 少しは体の事考えろよ。★もう、若くないんだからさ。

涼太 ☆へえ、へえ、へえ、へえ。

菜穂 お父さんの言う事、聞いてあげて。

涼太 ええ？

菜穂 今日は、お父さんのお誕生日だから、お父さんが王様なんだよ。

ケーキもあるんだよ。

涼太 風太郎が王様？

菜穂 うん。

涼太 すごい時代になっちゃったな。

菜穂 菜穂はお姫様だよ。

風太郎 タマはどこ行った？

涼太 さつきベランダで寝てたぞ。

風太郎 あいつ、調子はどうなの？

涼太 いやあ、アレは、俺よりも先に死ぬな。

菜穂 え？！タマ、死んじゃうの？

風太郎 大丈夫だよ。でも、もうおじいちゃんなんだから大事にしてあげなさい。

菜穂 おじいちゃんと、タマと、どっちがおじいちゃん？

涼太 そりゃあ、タマだよ。おじいちゃんは、まだまだこれからだよ。

菜穂 すごい！

涼太 菜穂ちゃんも、ちゃんとすごい男と一緒にになりなさい。

菜穂 じゃ、おじいちゃんと一緒にになる。

涼太 よし。大きくなったらおじいちゃんのお嫁さんにしてやるから。

菜穂 嬉しい！

風太郎 やめとけやめとけ。

鮎子 鮎子戻る。盆の上には、3人分のお茶と、オカキの小皿が。

鮎子 なんか、オカキ位しかなくて・・・。

涼太 豪華、豪華。

鮎子 もうすぐ、お寿司もつきますから・・・タマは？

風太郎 さつき、ベランダに居たって。(ポリポリオカキを食べる)

鮎子 え？だって、雨？！

涼太 大丈夫だよ、アイツだって子猫じゃないんだから。
菜穂 お母さん、菜穂ね、大きくなったらおじいちゃんのお嫁さんになるんだよ。

鮎子 はいはい（ゾンザイに）。

涼太 いやあ、長生きはするもんだね。

鮎子 はははっ、勘弁してくださいよ。ねえ、
風太郎 ん？

鮎子 オカキ、食べすぎ。

風太郎 ああ、うん。（指に残った塩をなめる）

鮎子 指なめない！もう、やあねえ。

風太郎 いや、塩が旨くて。

鮎子 ヤダヤダッ。菜穂！まねしないの！（お尻を叩く）

涼太 腹が減ってきたな。鮎子さん、寿司はまだ？

菜穂 お母さん、ケーキ食べたい。

鮎子 ええ？困ったわね。

菜穂 ケーキ、ケーキ、★ケーキ、ケーキ……！

涼太 ☆すーし、すーし、すーし、すーし……すし。

菜穂 ねえちよつと、あたし、先にケーキ食べたいんだけど。（遠慮なく）

風太郎 え？ああ、うん。

菜穂 王様が、いいって。

鮎子 そうねえ、……じゃあそうしようか！

③*②*②

タマ、よろよると入ってくる。

タマ ……（咳をする）。

菜穂 あ、タマ？

タマ ……

タマ、ペトリと座り込む。

風太郎 オイ、大丈夫か？

タマ （力なくうなづく）

涼太 よーし、よーし（ぐいぐいと強引になでる）。

タマ ……っ（微かに舌打ち）。

菜穂 タマ、ケーキ食べる？

涼太 あれ？なんか、濡れてるな？

鮎子 やだ（心配して）

菜穂 王様！早く、タオルを。

風太郎 え？ああ。

風太郎、タオルを取りに退場する。

涼太 よーしよし、大丈夫かオマエ？

タマ ……。

鮎子 タマ、どうしたの？タマ？タマちゃん？

タマ ……。

菜穂 (口元に耳を寄せて) なんか、にやごにやご言ってるよ？

菜穂、猫のぬいぐるみを取りに退場する。

鮎子 なんだろう、大丈夫かな？

タマ ……。

菜穂 タマ、タマ！しっかりして。ほら、ガールフレンドだよ。(猫のぬ

いぐるみを見せる)

タマ ……(涼太の背に手をかける)。

涼太 よーしよし、いいこだ、いいこだ。

タマ ……。

風太郎、バスタオルをもって登場する。

菜穂 早く！

風太郎 大丈夫か、タマ？(タマにバスタオルをかけてやる)

タマ ……。

タマ、バスタオルを振り払い、ヨロヨロと立ち上がって玄関へ向かう。

鮎子 え？お外？何？タマ、お外出たいの？

タマ ……。

鮎子 雨よ、お外は雨なのよ？ねえ、タマちゃん。

涼太 おい、おしっこじゃないのか？

鮎子 ああ、でも。

タマ ……。

鮎子 気をつけるのよ(玄関のドアを開けてやる)。

タマ ……。

菜穂 いってらっしゃい、タマ！

タマ ……(鮎子を、じっと見つめてから歩き出す)。

鮎子 タマ？

タマ、玄関からヨロヨロと出て行く。

鮎子 タマ？大丈夫なのね？

菜穂 ねえ、お母さん、ケーキ食べたい。

鮎子 ちよつと、待ちなさい。

菜穂 もう、お母さん、タマと菜穂とどっちが好きなの？

鮎子 菜穂に決まってるでしょう？いいこにして。

菜穂　じゃ、タマとお父さんだったら？

鮎子　タマに決まってるでしょう。

風太郎　よし菜穂、じゃあお父さんと一緒に準備しようか。

菜穂　うん！

鮎子　ごめん、私やるよ。

風太郎　いいよ、いいよ。さ、女王様、いきましようか。

菜穂　あなたを、ケーキ大臣に任命します。

風太郎　はいはいっ。

風太郎、菜穂、楽しみに、行進するように退場。

③*②*③

涼太　大丈夫だよ、すぐ戻ってくるって。

鮎子　・・お父さん。

涼太　ん？

鮎子　猫は死ぬ時、姿を消すっていう話、聞いたことありますか？

涼太　ああ、それで気にしてたのか。

鮎子　いや、なんとなく。

涼太　どうだかなあ。あれは、養生しようとして、敵に見つかりにくところ

に隠れるだけだって、聞いたことがあるけど。

鮎子　そうなんですか？

涼太　隠れてじっとしてるうちに、死んでしまうのもいるんだろ、きつ

と。

鮎子　なんだか、かわいそう。

涼太　でもうちのじいさんが、昔、言ってたな。

鮎子　じいさんて、お父さんのおじいさんですか？

涼太　あのね、死ぬ時に誰かに看取られた猫は、もう二度と、生まれ変

わることはないんだって。

鮎子　なんですか？それ。

涼太　だからさ、もう一度生まれ変わりたい猫は身を隠す。未練の無い

猫は、身を隠さずに、誰かの側で死ぬ。

鮎子　本当ですか？それ。

涼太　じいさんが昔飼ってた三毛猫がね、やっぱり、身を隠したらしい

んだな。

遠く雨の中、ねこのぬいぐるみを抱いたひとりの女(清美)が静かに歩いている。

鮎子　へえ。

涼太　その消えた三毛猫がね、ある晩、夢枕に立ったらしい。

鮎子　夢？

涼太 そう、夢枕に立って、じいさんのことを、こうじつと見てね、「私、これからもずっと側にいるから」って言ったんだって。

鮎子 あら、健気な。

涼太 で、言ったとたんにみるみる姿が変わってね、じいさんが昔捨てた、女の人の姿になっちゃったんだって。

傘も無く雨の中を歩いていた女、立ち止まりじつと雨空を見上げている。

鮎子 それって、・・・悪夢の話ですか？

涼太 怖い話だろう？

鮎子 まあ、確かに怖いですけど。

涼太 人でも猫でも、メスは怖いぞ、っていう話しだな。

鮎子 はあ。

女は、静かに雨の奥に去る。

涼太 そのことがあつてから、うちは代々、三毛猫は飼っちゃいかんてことになつてね。

鮎子 へえ。

菜穂 (声) おじいちゃん。準備はいい？

涼太 おう、待ってました。

鮎子 まあでも、女を怖くするのは、いつも、男ですからね・・・

ふいに電気が消える。真っ暗。

風太郎 (歌) ハッピーバースデイ、トウ、ユウ。ありや？なんだこれ。オイ！ライター、どこにあつたつけ？

菜穂 (声) お父さん、電気消すの早いよ！

鮎子 (声) ったく、しょうがないんだから・・・。今行くわよ！痛てっ！

ああ、もう！チクシヨウ。どいつもこいつもっ。

涼太 (声) 怖い怖い・・・。

④*①*①

雨の音がしている。

風太郎が台所からお湯を入れたカップラーメンを持って現れる。新聞を探し座卓に座る。遠くに雷鳴。風太郎、窓を見上げる。カップの蓋をはがしとる。

カップめんを感動無く啜る風太郎、新聞を広げながら、もう一度窓の外の雨を見る。やがて、雨音に混じり、ドアの鍵をあける音。

鉄平、遠藤、登場。遠藤は手にスーパーの袋。部屋に人がいることにひどく驚く。

鉄平 え、あ？！

風太郎 ・・おかえり。

鉄平 ちよっ、お父さん、何、してんの！！

風太郎 うん、ちよつと・・・。

鉄平 あ！俺のラーメン勝手に食ってんじやねえよ。
風太郎 ごめん。あんまり腹が減ったもんだから・・・お友達？
鉄平 ああ。遠藤、あの、高校ん時の。
遠藤 あ、はじめまして・・・遠、藤です。あの、お父様、ですか？ですよ？
風太郎 すみません、お邪魔しちゃって。
遠藤 あ、あ、はじめまして。どうも・・・。
鉄平 何？どうしたの？急に？
風太郎 いや、ちよつと、こっちの方に出て来る用事があったから・・・。
鉄平 なんだよ、何かあったの？
遠藤 そんな言い方はないでしょう？親に向かって。ねえ？
鉄平 来るなら、来るって、先に連絡してよ。
遠藤 あの、今、お茶でも・・・。
風太郎 あ、私がいれましょうか？
遠藤 いえ、そんな！あの、今・・・。
風太郎 遠藤、スーパの袋を持って、台所の方向へ。
風太郎 なんか、悪かったね。
鉄平 のびちやうよ、ラーメン。
風太郎 ああ、うん・・・。
風太郎 風太郎、座卓にもどり、ラーメンを啜る。
鉄平 お母さん、元気？
風太郎 最近、仕事、忙しそうだし。
鉄平 そう。
風太郎 夜中まで帰って来ない。まあ、元気みたいだけど。
鉄平 姉ちゃんは？
風太郎 全然帰って来ない。まあ、元気なんだろうけど。
鉄平 そっか。シロは？
風太郎 アイツ今、発情期でさ。
鉄平 え？だって、もうおばあちゃんでしょう？
風太郎 うん、でも、ばっちり発情しちゃってさ、にやごにやご言っ
て、すごいんだよ。
鉄平 へえ。大変だね、猫の恋も。
風太郎 また、昔っからモテるんだ、アイツは。
鉄平 そっか。シロのやつ、まだ、発情するんだ。
風太郎 お前は、どうなの？
鉄平 は？何言ってるの？

風太郎 いや、違う違う。発情期のことじゃなくて。

鉄平 ああ、ああ。

風太郎 元気でやってるのか？

鉄平 まあ、うん、それなりに。

風太郎 そうか。良かった。

鉄平 うん。

遠藤、マグカップの3つ乗ったお盆を持って登場。微笑ましそうに風太郎を見て。

遠藤 ・・よく似てらっしゃいますね、やつぱり。

風太郎 (むせる)

遠藤 あ、ごめんなさい。大丈夫ですか？(背中を優しくポンポン叩く)

風太郎 あ、大丈夫、大丈夫。

遠藤 どうぞ、良かったら・・。(飲み物を勧める)

風太郎 すみません。

遠藤 あの、わざわざありがとうございます。

風太郎 え？

遠藤 ケーキ。冷蔵庫あけたら。

風太郎 ああ、ああ。

遠藤 お土産に、ケーキ持ってきてくれたんだよ。

鉄平 へえ、ありがとう。

風太郎 うん、まあ。(飲み物を飲み)

鉄平 甘いものなんて珍しいね。

風太郎 ま、たまには。

鉄平 家では塩せんべいばかり食べてたんだよ。ポリポリ、ポリポリ。

遠藤 ええ？(笑)

風太郎 おいしいですね、これ。

遠藤 あ、ちよつと、カフェラテみたいにしてみたんですけど。

風太郎 ラッテ？

遠藤 牛乳がたくさん入ってるんですけど。

風太郎 へえ。

遠藤 ごめんなさい。お茶の方がよかったですか？

風太郎 いやいや、うん、おいしい。

遠藤 良かった。

鉄平 おいしい。

遠藤 おいしい？

鉄平 ん。

風太郎 じゃ、そろそろ行こうかな・・。

鉄平 え？来たばかりじゃない？
風太郎 いいよもう、お前の顔も見れたし。
鉄平 でも、なんか。
風太郎 雨もひどいし。まあ、あんまりお邪魔してもね。
遠藤 邪魔だなんてとんでもないです。
風太郎 いや、どう見ても邪魔だろう、俺は。
遠藤 あ・・せっかくだから、ケーキ、今出しましょうか？
風太郎 いやいや、どうぞ、後でおふたりで。
遠藤 でも・・。
鉄平 え、2個しかないの？
風太郎 いや、この位の苺の丸いのを買ったんだけど。
遠藤 わあ、かわいい！
鉄平 じゃあ、皆でつつこうよ。
風太郎 いい、いい、そんな恥ずかしいよ、大の男が。
鉄平 なんだよ。自分で買ってきたんだろう？
風太郎 いや、それは・・。だって、遠藤さんもいるのに、なんか恥ずかしいじゃない。
遠藤 そんなことないですよ。男の人がケーキ食べたって、私、ちっともおかしくないと思いますよ？
風太郎 いやね、ちよつと。
鉄平 何？
風太郎 いや、いい。
鉄平 なんだよ、もう。言えよ。
風太郎 あの・・今日ね、たまたま、私の誕生日だったもんだから。
遠藤 え。
風太郎 それでね、ついケーキなんぞを。
鉄平 ごめん・・。
風太郎 いや、いいんだいいんだ、皆、忘れてるんだから。
遠藤 なんでそんな大事なこと忘れてたの？
鉄平 いや、ごめん、お父さん、おめでとう。
遠藤 おいくつになったんですか？
鉄平 五十四だ。
風太郎 五だよ！
鉄平 え？あれそうだっけ、おかしいな。
遠藤 じゃあ、ロウソクいっぱい立てなくちゃ！
鉄平 ああ、うん。

風太郎 いや、いいんですよそんな。自分でもね、さっきまで、忘れてたくらいで。

遠藤 今日、お鍋にしようと思ってるんです。よかったら、お父様も一緒に。

鉄平 ああ、そうだよ、飯食ってきなよ。

風太郎 でも、カップラーメンも、食ったし。

鉄平 ダメだよ、こんなんじや。

遠藤 すぐに支度、しますから・・・。

遠藤、再び台所に退場。

④*①*②

風太郎 夕方さ、急に雨が降りだしただろう？

鉄平 ああ。

風太郎 それで思い出したんだよ、誕生日だったなって。

鉄平 そっか。もう、台風の季節なんだな。

風太郎 あのさ・・・。

鉄平 何？

風太郎 一緒に住んでるの？

鉄平 え？ああ・・・。

風太郎 いつからだよ。

鉄平 ああ、いや、まあなんていうか。うん。

風太郎 なんだよ、言ってくればいいのに。

鉄平 ごめん。

風太郎 美人さんじゃない。

鉄平 ああ、そう？

風太郎 ちよつと、母さんに似てるな。

鉄平 ええ？！やめてよ、気持ち悪い。

風太郎 結婚するつもりなのか？

鉄平 いや・・・結婚はちよつと。

風太郎 でも、高校の時からって、ずいぶん長いじゃない。

鉄平 その頃は、フツウに友達だったんだけど。

風太郎 とにかくさ、一緒に住んでるんなら、一度お母さんにも紹介しな

さいよ。

鉄平 いや、いいよ。そんな。

風太郎 ちゃんとしないと、あの子にだって悪いだろう？

鉄平 遠藤だよ。

風太郎 そうだよ、遠藤さんにも悪いじゃないか、ちゃんとしないと。

鉄平 部活で一緒だったんだよ。高校ん時。

風太郎 うん。いいじゃないか。

鉄平 4番でエースだったんだよ、遠藤は。

風太郎 エース？

鉄平 スゴいいい選手で。野球部だったでしょ、俺？

風太郎 ああ、うん。

鉄平 俺は、補欠だったけど・・・。

風太郎 ごめんな、俺に似て足が遅いんだ、お前は。

鉄平 だから、そういう事だからさ。

風太郎 どういうこと？

鉄平 だから、同性だったことだよ。

風太郎 だから、同棲してるんなら、ちゃんと。

鉄平 そっちじゃないよ。

風太郎 え、・・・え？え？！いや、あ・・・。

鉄平 結婚は難しいっていうのは、そういうことだから。

風太郎 いや？本当に？

鉄平 お父さんさ、お母さんと、最初にあった時のこと、覚えてる？

風太郎 え？

鉄平 俺はね、良かったって思ってるんだ・・・なんか、うまく言えない

けど。遠藤と会えたの、すごく、良かったって。

風太郎 いや・・・なんて言ったらしいのか。

鉄平 鍋、食っていつてよ。皆でケーキも食べよう。せつかく久しぶりに

会ったんだしさ。

風太郎 じゃ、そろそろ行こうかな・・・。

鉄平 人の話、聞ってる？

風太郎 いや、だって、もう、なんて言ったらいいのか・・・。

④*①*③

遠藤、台所からエプロン姿で登場。

遠藤 あのう、ポン酢と、ゴマダレと、どっちが大好きですか？

風太郎 え？いや、あ。

鉄平 どっちも出したら？

遠藤 あ、そうか、そうだよな。いいですか？

風太郎 いや、はい。なんて言ったらいいのか。

遠藤 どうかしたの？

鉄平 ・・・・。

風太郎 あの、4番でエースだったって本当ですか？

遠藤 え。

鉄平 今、その話を。

遠藤 ……

風太郎 4番、だったんですか？

遠藤 ……はい。

風太郎 そうですか。

遠藤 あの、

風太郎 じゃ、そろそろ行こうかな…。

鉄平 ちよっと、待ってよ。

風太郎 いや、だから。今は、ちよっとなんて言ったらいいのかわからないから。

鉄平 ヒドイじゃない、そんな。

風太郎 だって、驚くでしょフツウ、こんな。こんなのもって。

鉄平 なんだよ、勝手に来といてき、上がりこんでラーメンまで食って！

遠藤 鉄平君。いいよ、私が外出るから。

鉄平 え？

遠藤 久しぶりなんでしょう？お父さんとふたりで御飯食べて、ね。ちやんと、落ち着いて話した方がいいよ…私、出かけてきますので、お願いですから、ゆっくりなさっていつててください。

風太郎 いや、でも…。

遠藤 いいながら手早くエプロンをはずして鉄平に渡し。

鉄平 どこ行くの。

遠藤 大丈夫よ、子供じゃないんだから。お鍋、下ごしらえしてあるから、後お願いね。

鉄平 ……

遠藤 あの…鉄平君のお父さん？

風太郎 ……いや、なんて言ったら。

遠藤 すっごく嬉しかったです、私。こうやって、お目にかかれて。私、一生、お会いできることなんてないと思ってたんです。鉄平君の、お父さんやお母さんと、こんな風にお話しをしたり、お茶を飲んだりできるなんて、そんな夢みたいな…。あの…お誕生日、おめでとうございます。

遠藤、退場。

鉄平 ……

風太郎 追いかけたほうが…。

鉄平 え？

風太郎

いや。

鉄平

せつかく準備してくれたんだから、鍋食おうか。

風太郎

うん・・・。

鉄平

大丈夫だよ。ああいうヤツなんだ。

風太郎

なんか、ごめん。

鉄平

したく、してくる。旨いよ、うちの鍋。

風太郎

・・・。

鉄平

すぐ、できるから、・・・。

風太郎、遠藤のエプロンを持って台所へ退場。雨音と一緒に清美がやってくる。

清美は、猫のぬいぐるみを抱いている。

④*②*①

清美

・・・行っちゃった。

風太郎

・・・。

清美

(少し微笑んで、ため息を吐き) すごい雨だね。

風太郎

ねえ、お母さん、「結婚」って何？

清美

どうしたの急に？

風太郎

ううん、なんでもない。

清美

お母さん、よくわからないわ。結婚のことは、むずかしすぎて。

風太郎

そう。

清美

ねえ、あなたが生まれた晩もね、こんな風に、どしやぶりの雨だったでしょう？覚えてる？覚えてるわけないわね・・・。

風太郎

お母さん？

清美

ん？

風太郎

ぐあい、悪いの？

清美

え？どうして？

風太郎

なんとなく。

清美

雨の日ってね、ちよつと悲しくなりやすいものなのよ。・・・さて、

お寿司が来る前にお吸い物でも作るか・・・。風太郎も、御飯の前に、ちゃんとお片付けしなさい。

いいながら、猫のぬいぐるみを渡す。

風太郎

お母さん。

清美

ん？

風太郎

悲しくなんてないよ。だって、今日は、お誕生日なんでもん。

清美

(にっこりして) 風太郎、その子のことも大事にしてあげてね。

風太郎

うん、この子はね、ブチのお嫁さんにするの。

清美

そう。そうね。

風太郎　それでね、ふたりはね、いつまでも幸せに暮らすんだよ。
清美　・・・そうね（微笑む）。

清美、退場。風太郎、猫のぬいぐるみをなでる。

ドアをノックする音がする。風太郎、ぬいぐるみを持ったまま、あけにゆく。

風太郎　はい・・・。

沢子　どうも。あなた、風太郎君？

風太郎　はい。

沢子　お母さん、いる？

風太郎　今、お料理をしてる・・・。

沢子　じゃ、お父さん、いる？

風太郎　オバサン誰？・・・悪い人？

沢子　悪い人っていうのはね、風太郎君のお母さんみたいな人の事を言うのよ。

風太郎　オバサン、何言ってるの？

沢子　オバサンじゃないわよ。私はね、風太郎君の、お父さんの、奥さん。

清美が台所から戻る。

清美　・・・。

沢子　どうも、お元気でした？

清美　どうも・・・。

沢子　主人の仕事先の方から、随分立派な焼き菓子をいただいたので。お中元には、ちよつと遅すぎますけど。（紙袋から菓子折りを取り出し）

清美　すみません、わざわざ。

沢子　いつも、主人がお世話になりました。ありがとうございます。

清美　・・・。

沢子　あの人、います？

清美　ついさっき、出かけて。

沢子　そう・・・。うちは小さい子がいないから、いつもお菓子が全然減らなくって。

風太郎　じゃあ、自分で食べればいいのに。

沢子　だって、高級なお菓子って、ひとりで食べると侘しくなるでしょう？

風太郎　・・・よくわかんない。

清美　風太郎、あつちについてなさい。

沢子　いえ、いいんですよ。私、もうこれで失礼いたしますから。じゃ。

清美 お足元の悪い中を、どうも……。(深くお辞儀をする)

沢子、深くお辞儀をし、アパートの戸を閉め、去る。清美、じっとしたまま。

清美 ……風太郎。

風太郎 ……。

清美 知らない人が来たら、勝手にドアを開けちゃダメって、いつもいつてるでしょう？

風太郎 お母さん。

清美 何？

風太郎 お母さんは、悪い人なの？

清美 ……。

清美、ゆっくりと風太郎に歩み寄り、しゃがんで膝をつき、風太郎をそっと抱きしめる。

④*②*③

風太郎 ……。

清美、風太郎の背中を、あやすようにポンポンとたたく。子守唄を歌うように「お誕生日おめでとう」の歌をハミングで、途切れ途切れに、小さく歌う。

雨の音が強くなる。

菜穂と泉谷が遠くに現れる。二人は傘をさした姿で、手にはそれぞれマグカップを持っている。風太郎と清美だけが畳の上にいる。

菜穂 ねえ、夢だったんじゃないの？

風太郎 え？

菜穂 さっきの、悪い人の話。

泉谷 ああ。

菜穂 昼寝してて、夢でも見たんじゃないの？

風太郎 違うよ。

泉谷 どうなったんですか？そのあと。

風太郎 え？

泉谷 その人に、悪い人に、「お母さんよ」って言われて。

風太郎 ああ、いや、それが、その後が、よく思い出せないんだけど……。

菜穂 お父さんさ、家でもよく、うたた寝してたじゃない。もう、どこ

でも寝られるのよ、この人は。

泉谷 へえ。

風太郎 そんなことないよ。

菜穂 嘘。うちの弟の結婚式の時もね、ずーっと寝てたんだから。

泉谷 え？結婚式って、鉄平君の！？

菜穂 花束贈呈の前になって、やっと起きたの。

清美、台詞が進む中で、ゆっくりと腕を風太郎の体から腕をはがす。そして、ゆっくりと立ち上がり、出口の方に向かって歩いてゆく。

風太郎 寝てないよ。

菜穂 だってずーっと、下向いてたじゃない。

風太郎 泣くのを我慢してたんだろそれは。

清美、立ち止まり、風太郎の方を向いて。

清美 風太郎、泣いちやダメ。泣いたら負けなんだよ。(優しく)

泉谷 明日、鉄平君のところにもご挨拶に。

風太郎 ああ。

清美

泣いてもいい時はね、みつつだけなの。自分が生まれた時と、大切な人が死んだ時。あとはね、生まれてきて良かったって、思えた時。

清美、去る。

⑤*①*① 風太郎の33才の誕生日

風太郎

菜穂 お帰りなさい！

風太郎 たいま。

菜穂 (傍に飛んでゆく) ちゃんと、うがいたした？

風太郎 したよ、手も洗ったし。

菜穂、自分が被っているのと同じ、紙製の王冠を風太郎にかぶせる。

風太郎 これ何？

菜穂 王様の冠だよ。菜穂が作ったの。

風太郎 そうか、ありがとう。

菜穂 あのね、今日は、お誕生日だからね、お父さんが王様なんだって。

風太郎 そうかそうか・・・

菜穂と、お揃いなんだよ。

風太郎 うん。

アパートのドアが開く。風太郎の妻、鮎子が立っている。鮎子は身重。

手にはケーキの箱の袋と、買い物袋。

鮎子 たいま。あら、早かったね。

風太郎 ★おかえり。

菜穂 ☆おかえりなさい！

鮎子 急に、雨降ってきてさ。

菜穂 お母さん、見て！お揃いなの。

鮎子 (笑) それじゃ、どっちが王様かわからないね。

菜穂 うん！

鮎子 ふんぱつしてケーキ、買っちゃった。ショートケーキ、苺の！

菜穂 ケーキーツ!!

風太郎の父の涼太が現れる。手にはビール瓶とグラス。

涼太 ……

鮎子 お父さん、もうビールですか？

菜穂 おじいちゃん、見て！お揃いな。

涼太 おお。綺麗、綺麗。なんか、つまみあったつけ？

鮎子 ええ？でも、もうすぐお夕飯なので。

涼太 メシ？

鮎子 お寿司、頼んであるんですよ。

涼太 おお。豪華、豪華。

風太郎 かっぱ巻きは？

鮎子 ……

鮎子退場。

風太郎 ホラ、菜穂、御飯の前にちゃんとおかたづけしなさい。

菜穂 はーい。

風太郎の父の涼太、座って新聞を読んでいる。虫眼鏡をつかっている。

風太郎 ちょっと飲みすぎなんじゃないの？

涼太 大丈夫だよ、コレくらい。

風太郎 少しは、体の事考えろよ。★もう、若くないんだからさ。

涼太 ☆へえ、へえ、へえ、へえ。

菜穂 お父さんの言う事、聞いてあげて。

涼太 ええ？

菜穂 今日はね、お父さんが王様なんだよ。ケーキもあるんだよ。

涼太 風太郎が王様？

菜穂 うん。

涼太 すごい時代になっちゃったな。

菜穂 菜穂はお姫様だよ。

風太郎 タマはどこ行った？

涼太 さっきベランダで寝てたぞ。

風太郎 あいつ、調子はどうなの？

涼太 いやあ、アレは、俺よりも先に死ぬな。

菜穂 え？！タマ、死んじゃうの？

風太郎 大丈夫だよ。でも、もうおじいちゃんなんだから大事にしてあげなさい。

菜穂 おじいちゃんと、タマと、どっちがおじいちゃん？

菜穂

涼太 そりゃあ、タマだよ。おじいちゃんは、まだまだこれからだよ。
菜穂 すごい！

涼太 菜穂ちゃんも、ちゃんとすごい男と一緒にになりなさい。
菜穂 じゃ、おじいちゃんと一緒になる。

涼太 いいよ。大きくなったらおじいちゃんのお嫁さんになりなさい。
菜穂 嬉しい！

風太郎 やめとけやめとけ。

鮎子 エプロンをして戻る。盆の上には、3人分のお茶と、オカキの小皿が。

鮎子 なんか、オカキ位しかなくて・・・。

涼太 豪華、豪華。

鮎子 もうすぐ、お寿司もつきますから・・・タマは？

風太郎 さつき、ベランダに居たって。(ポリポリオカキを食べる)

鮎子 え？だって、雨？！

涼太 大丈夫だよ、アイツだって子猫じゃないんだから。

菜穂 お母さん、菜穂ね、大きくなったらおじいちゃんのお嫁さんにな
るんだよ。

鮎子 はいはい(ゾンザイに)。

涼太 いやあ、長生きはするもんだね。

鮎子 はははっ、勘弁してくださいよ。ねえ、

風太郎 ん？

鮎子 オカキ、食べすぎ。

風太郎 ああ、うん。(やっど食べるのをやめる)

鮎子 指なめない！もう、やあねえ。

風太郎 いや、塩が旨くて。

鮎子 ヤダヤダッ。菜穂！まねしないの！(お尻を叩く)

涼太 腹が減ってきたな。鮎子さん、寿司はまだ？

菜穂 お母さん、ケーキ食べたい。

鮎子 ええ？困ったわね。

菜穂 ケーキ、ケーキ、★ケーキ、ケーキ・・・！

涼太 ☆すーし、すーし、すーし・・・すし。

菜穂 ねえちよつと、あたし、先にケーキ食べたいんだけど。(遠慮なく)

風太郎 え？ああ、うん。

菜穂 王様が、いいって。

鮎子 そうねえ、じゃあそうしようか。

⑤*①*②

タマ、よろよると入ってくる。

タマ ……

菜穂 あ、タマ？

タマ ……

タマ、ペトリと座り込む。

風太郎 オイ、大丈夫か？

タマ (力なくうなづく)

涼太 よーし、よーし(ぐいぐいと強引になでる)。

タマ ちっ(微かに舌打ち)。

菜穂 タマ、ケーキ食べる？

涼太 あれ？なんか、体が濡れてるな？

鮎子 やだ(心配して)

菜穂 王様！早く、タオル。

風太郎 え？ああ。

風太郎、タオルを取りに退場する。

涼太 よーしよし、大丈夫かオマエ？

タマ あの…。

鮎子 タマ、どうしたの？タマ？タマちゃん？

タマ 奥さん、…本当に長い間、お世話になりました…。

菜穂 なんか、にやごにやご言ってるよ？

菜穂、猫のぬいぐるみを取りに退場する。

鮎子 なんだろう、大丈夫かな？

タマ 奥さん。奥さんの膝の上で眠るのが、僕の最高のひと時でした。

もし、生まれ変わることができればなら、もう一度、あなたの膝の上でノドをならしたい…。

菜穂 タマ、タマ！しつかりして。ほら、ガールフレンドだよ。(猫のぬいぐるみを見せる)

タマ それから、爺さん。猫の尻尾は掴むもんじゃないよ。そんな触り方してつと、いつか化け猫が夢に出て、一生呪われるよ。

涼太 よーしよし、いいこだ、いいこだ。

タマ 奥さん、ずっと、ずっと好きでした。あなたに抱き上げられた時の、あの、柔らかい胸…。忘れません。

風太郎、バスタオルをもって登場する。

菜穂 早く！

風太郎 大丈夫か、タマ？

タマ 旦那、アンタ、時々よその女の匂いつけて帰って来たね。「男の甲斐性」、取り違えんなよ…。

タマ、バスタオルを振り払い、ヨロヨロと立ち上がって玄関へ向かう。

鮎子 え？お外？何？タマ、お外出たいの？

タマ ええ。奥さんに、ぶざまな姿を見せるわけにはいきませんから…。

鮎子 雨よ、お外は雨なのよ？ねえ、タマちゃん。

涼太 おい、おしっこじゃないのか？

鮎子 ああ、…でも。

タマ 奥さん、お願いです。どこかで静かにひっそりと、一匹で死なせてください。

鮎子 気をつけるのよ（玄関のドアを開けてやる）。

タマ さようなら皆さん、お元気で。どうか、良い人生を…。

菜穂 いったらっしやい、タマ！

タマ お嬢ちゃん、どうか、いい女になってください。ご縁があれば、またいつか。

鮎子 タマ？

タマ 奥さん…。きつと、またいつか。さようなら。

タマ、玄関からヨロヨロと出て行く。

鮎子 タマ？大丈夫なのね？

菜穂 ねえ、お母さん、ケーキ食べたい。

鮎子 ちよつと、待ちなさい。

菜穂 もう、お母さん、タマと菜穂とどっちが好きなの？

鮎子 菜穂に決まってるでしょう？いいこにして。

菜穂 じゃ、タマとお父さんだったら？

鮎子 タマに決まってるでしょう。

風太郎 よし菜穂、じゃあお父さんと一緒に準備しようか。

菜穂 ヤダ！

鮎子 ごめん、私やるよ。

風太郎 いいよ、いいよ。俺がやるから。

菜穂 じゃ、王様、さっさと支度してください。

風太郎 はいはいっ。

⑤*①*③

風太郎、退場

涼太 大丈夫だよ、すぐ戻ってくるって。

鮎子 ああ、はい。

菜穂 ねえ、お母さん。タマにもお誕生日ってあるの？

鮎子 もちろんあるわよ。

菜穂 猫なのにな？

鮎子 お誕生日の無い生き物なんて、いないのよ。

菜穂 猫の世界でも、お祝いするの？

鮎子 どうかなあ？するのかもしれないよ。

菜穂 でも、なんでお祝いするの？

鮎子 え？・・・それはだって、おめでたいからでしょう？

菜穂 なんでおめでたいの？

鮎子 なんてっていつてもねえ・・・。

菜穂 それはさ、「会えて良かったね」って言うことだよ。

涼太 え？

涼太 お母さんとお父さんが、菜穂ちゃんに初めて会えた日だからおめでたいんだよ。

菜穂 じゃ、おじいちゃんも、お父さんと初めて会えた時、嬉しかった？

涼太 ・・まあ、そりゃ。

菜穂 ・・？

鮎子 あんまり変な質問するんじゃないの。嬉しかったに決まってるでしょう？

涼太 おじいちゃんね、アイツが生まれたとき、お仕事で側にいなかったから。

菜穂 そうなの？可哀想。

涼太 風太郎が生まれた日はね、すごいどしゃぶりだったんだよ。

菜穂 雨だったの？

涼太 うん。最初全然泣かなくてさ。それでお医者さんが、バシバシケツを叩いてね、それでやっと泣いたんだって。後で聞いたんだけど。

菜穂 え〜！お父さんが、泣いたの？！

鮎子 お父さんだって、赤ちゃんの時は泣いたのよ？

菜穂 へんなの。

鮎子 赤ちゃんはね、皆、生まれてきたらすぐ大きな声で泣くの。菜穂だってそうだったよ。

菜穂 覚えてない。

鮎子 そりゃ、仕方ないわよ。

菜穂 この子も泣くの？

鮎子 そう。それで初めて、息をするのよ。

菜穂 悲しくて泣くの？

鮎子 うーん、どうかなあ？

涼太 そりゃあ、悲しいよ。急にひとりになるんだから。

菜穂 ひとり？

涼太 そうだよ。生まれるときも、死ぬ時も、皆ひとりぼっちなんだよ。

菜穂 そうなの？

涼太 そう。だから、生まれてきた時は自分で泣いて、で、死ぬ時にはね、代わりに周りの人に泣いてもらうの。最後に泣いてくれる人が、もし一人でも居れば、上等。もうそれだけでね、人生上出来なんだよ。

菜穂 上出来？

涼太 だから、おじいちゃんが死んだらさ、菜穂ちゃん、いっぱい泣いて頂戴ね。

菜穂 おじいちゃん、死ぬの？

鮎子 やめてくださいよ、そんな話し。ホントにもう、飲んだくれはヤダヤダ。

涼太 お酒があれば、もっと上出来。

鮎子 ったく、しょうがないんだから・・・。

⑤*②*①

ふいに電気が消える。

菜穂 あ。

風太郎、ゆつくりと登場。手にはろうそくの火がついたケーキを持っている。

風太郎 (歌) ハッピーバースデー、トウ、ミイ。ハッピーバースデー、

トウ、ユ。ハッピーバースデー、ハッピーバースデー・・・

ハッピーバースデー・トウ・ユ。

菜穂、鮎子、涼太、途中から一緒に歌う。手拍子を入れたりしながら。

と、降る雨の色がみるみる変わります。キラキラと光る、雨の粒。

ハッピーバースデー、トウ、ユ。ハッピーバースデー、トウ、ユ。

ハッピーバースデー、ハッピーバースデー・・・ハ

ッピーバースデー・トウ・ユ。

やがて、歌の響く中、清美、鉄平、も歌いながら傘をさした姿で静かに現れて、一緒に口ウソクを覗き込む。

清美 風太郎、ホラ、願いをかけて。

風太郎 え？

清美 願い事をするの。それで、この火を全部吹き消したらね、その願い事が叶うのよ。

風太郎、まわりの人の顔をぐるりと見て、目を閉じ、何かを念じ、一気に吹き消す。ろうそく、消える。大きな拍手が沸きあがる。

⑤*②*②

暗闇の中で、声と微かな雨音がする。

風太郎 お母さん。

清美 なあに？

風太郎 あの話、ホントだったの？

清美 え？

風太郎 ロウソクの火を吹き消すと、願いが叶うっていう話。

清美 ああ・・・。

風太郎 お母さんは、信じてた？どんな願い事でも叶うって？

清美 ホントはね、信じて無かった。

風太郎 そうか。僕も（笑）。

清美 ごめんね、風太郎。

風太郎 え？

清美 嘘ついて、ごめん。

風太郎 ううん。

清美 でもね、一度だけあったわ。

風太郎 え？

清美 お父さんがね、はじめてお母さんの誕生日を、お祝いしてくれた時。

風太郎 願いをかけたの？

清美 そう。

風太郎 火を、全部吹き消して？

清美 そう。そしてね、ある雨の日に、その願いが叶ったの。こんな風
に、どしゃぶりの雨だった。覚えてる？ちようど、台風の子節で・・・。

雨音が強くなり、優しく声を掻き消す。

⑥ * ① * ①

すうつと灯りがさす。風太郎、泉谷、菜穂、座卓についている。机の上には、飲
みかけのお茶。机の真ん中には、ケーキのかけらがほんの少しだけ残った大皿が
ある。菜穂、残ったケーキをフォークでつつきパクリと・・・。

泉谷 ・・おい。

菜穂 え？

泉谷 食べすぎだろ。

菜穂 何？

泉谷 今の。

菜穂 え？

泉谷 今の、最後の一口だよ！

菜穂 ああ。

泉谷 そこはやっぱり、お父さんに食べてもらわないと。

風太郎 いいよいいよ。
菜穂 ごめんなさい。
風太郎 いや、おもしろかった。こんなの久しぶりだよ。
泉谷 なんだからすみません。今日は、プレゼントのことから、何から、
風太郎 いやいや。
菜穂 だって、同じデパートで買ったんだもの。
泉谷 だからなんだよ。
菜穂 袋も同じだしさ、大きさも殆ど同じだったんだもの。
泉谷 ちゃんと確認しないからだろう。
菜穂 もういいじゃない。
風太郎 あのう。
菜穂 何？
風太郎 それ、もらってもいいかな。
菜穂 ああ、まあ……。
風太郎 うん。
泉谷 え。ぬいぐるみでいいんですか？
風太郎 せっかくだから、記念に。
泉谷 じゃあ、鉄平君には、オカキを持ってくか。
菜穂 まあ、ねえ。お父さんが、そんなに気に入ったんなら。
風太郎 昔、飼ってた猫にね、ちよつと顔つきが似てるような気がして。
菜穂 シロ？
風太郎 うん。
菜穂 シロっていうコがいたの、昔。
泉谷 へえ。
風太郎 いや、タマに似てるかな？
菜穂 タマって言うのはね、・・タマはね、私が子供の頃に死んじゃった猫。
風太郎 ああ、ブチだ。
泉谷 ブチ？
風太郎 泉谷さん。
泉谷 はい。
風太郎 猫は死ぬ時、姿を消すっていう話、聞いたことありますか？
泉谷 ああ、なんとなく。
風太郎 うちの親父がね、昔、言ってたんだけど。
菜穂 おじいちゃん？
風太郎 あのね、死ぬ時に誰かに看取られた猫は、もう二度と、生まれ変わることはないんだって。
菜穂 なにそれ。

風太郎 だからさ、もう一度生まれ変わりたい猫は身を隠す。未練の無い

猫は、身を隠さずに、誰かの側で死ぬ。

泉谷 本当ですか？それ。

風太郎 本当か嘘かは、ちよつと怪しいけどさ。ウチの親父の田舎には、昔からそういう話があったらしい。

菜穂 初めて聞いたな。

風太郎 だからね、本当に一緒になりたかった相手の側で死ぬるまで、なんどでもやり直すんだな、猫は。

泉谷 いやあ、なんとも。なんとも、いえない話しですね。

風太郎 なんと言ったらいいのか……。いや、上手く言えないんだけどね。

私みたいな人間が言うのも、なんだかアレだけど。せつかく縁あって一緒にいるんだから、その、ふたりにはね、ずっと幸せにやっつて欲しいって、思っつて、……。思っつてます。これで、最後というつもりで……。

菜穂 。

風太郎 泉谷さん。

泉谷 はい！

全員、座り直し、床に手をついて。

風太郎 菜穂のこと、未永くよろしくお願いいたします。

泉谷 いや、それは、ハイ。もちろんです。

風太郎 ……っ。(涙を抑える)

風太郎、よろよると立ち上がる。

泉谷 え、どこ行くんですか？

風太郎 ちよつと、便所に。

風太郎、立ち上がって去る。

⑥*①*②

菜穂 ……びっくりした。

泉谷 え？

菜穂 今、ちよつと泣いてた？

泉谷 ああ……。そうかもね。なんで？

菜穂 いや。

泉谷 何。

菜穂 はじめて、見たな。

泉谷 え？

菜穂 いや、……。泣くんだな、と思っつて。

泉谷 何だよ、それ。(笑っつて)

菜穂 いや、……。ううん。

泉谷 あく、無茶苦茶緊張しちゃったよ。

菜穂 だから、緊張しすぎだっつて言っつたじゃん。

泉谷 だってさ、するでしょう、そりゃあ。
菜穂 お父さん戻ったら、そろそろ行こうか？

泉谷 うん、そうね。

菜穂 ねえ。

泉谷 ん？

菜穂 私、まだ見たこと無いね。

泉谷 何？

菜穂 あなたが、泣くところ。

泉谷 そうか？

菜穂 うん。

風太郎は、便所で泣いている。それを守るように、清美が静かに表れ、風太郎に傘をさしかけている。

泉谷 いいじゃない、そんなの見なくたって。

菜穂 え？

泉谷 泣いてるより、笑ってる方がさ。

菜穂 そりゃ、まあそうだけど・・・。

泉谷 何？見たいの？カッコ悪いぞ、俺の泣き顔は。

泉谷、ふざけて泣きマネをする。

菜穂 バツカじゃないの。

ふたり、笑いながら。

泉谷 鉄平君ち、ホント、オカキでいいの？（ぬいぐるみを片手で触り）
菜穂 大丈夫でしょ、別に。結構好きなのよ、鉄平も。オカキとか塩せ

泉谷 んべいとか。

泉谷 へえ、そういうのって、遺伝するのかな？

菜穂 う〜ん？どうかなあ？（笑いながら）

風太郎、戻ってくる。清美、離れたところからしばし三人を見守っている。

風太郎 ……

菜穂 これ、飲んだらそろそろ行くね。

風太郎 ああ。そうか。

泉谷 あの、今日は、どうもありがとうとうございしました。

風太郎 いや、そんな・・・こちらこそ。

菜穂 雨、やみそうに無いね。

風太郎 ……

三人、黙って茶を飲む。雨の音が、静けさを気づかせる。清美は消えている。

風太郎 あ、

菜穂 え？

風太郎 いや、あの。送っていいこうか？駅まで。

菜穂 いいよ、そんな。

風太郎 いや、まあ、駅まで。

菜穂 いいよ、雨だし。

風太郎 せっかく、新しい傘もあるしさ。(泉谷の買った贈り物を手にして)

泉谷 すみません、なんか結局こんなものになっちゃって・・・。

風太郎 いやいや、そんな。

菜穂 ちよっと、派手すぎたんじゃない？

泉谷 いいんだよ。還暦は、「赤」って決まってるんだから。

風太郎

風太郎、部屋の中でバツと赤い傘を開く。雨の音、溢れるように強く。

風太郎

⑥*①*③

菜穂と、泉谷は、溢れる雨の音と共に立ち上がり、いつのまにか、部屋の外で傘をさしている。他の登場人物も、いつのまにか傘をさして街の中にいるようだ。

菜穂 じゃ、お父さん・・・体に気をつけてね。

風太郎 うん。

泉谷 あの、これからはもう少し僕たちも。

菜穂 じゃあ、また。

風太郎 うん。

泉谷 あの、今日は、どうもありがとうございました。

風太郎 いや、そんな・・・こちらこそ。

菜穂 じゃあね。

菜穂と泉谷は、雨の中に消えるように去ってゆく。

清美

風太郎

清美 (少し微笑んで) すごい雨だね。

風太郎、アパートに向かって、ひとり歩き出す・・・。帰り道をどんどん歩く。

耳の奥に流れ込む、雨の音と、遠い声。

タマ お元気で。どうか、良い人生を・・・。

清美 ねえ、あなたが生まれた晩もね、こんな風に、どしやぶりの雨だったでしょう？覚えてる？覚えてるわけないわね・・・。

鉄平 お父さんさ、お母さんと、最初にあった時のこと、覚えてる？

清美 風太郎、いるの？

菜穂 お父さん、おめでどう。(拍手)

タマ ご縁があれば、またいつか。

清美 ただいま、久しぶりだね。

遠藤 あの・・・鉄平君のお父さん？

沢子 あなた、風太郎君？

タマ さようなら。

鮎子 雨よ、お外は雨なのよ？ねえ。

菜穂 雨、やみそくに無いね。

涼太

そう。だから、生まれてきた時は自分で泣いて、で、死ぬ時にはね、代わりに周りの人に泣いてもらうの。最後に泣いてくれる人が、もし一人でも居れば、上等。

菜穂

お帰りなさい！

鮎子

猫は死ぬ時、姿を消すっていう話、聞いたことありますか？

涼太

おめでとうっ！（拍手）

清美

（小さくハミングで、ハッピーバースデイを歌いだす）

タマ

本当に長い間、お世話になりました・・・。

鮎子

ただいま。あら、早かったね・・・急に、雨降ってきてさ。

清美

今年もまた、雨なのね。

風太郎、ハッピーバースデイの歌を、かすかに短くハミングをして、アパートの前へ到着する。雨音の中、傘をたたみ、部屋をあける風太郎。

⑥*①*④

風太郎の目に飛び込む、祭りの後の部屋。

静寂。

ひとりの時間を実感し、一瞬、佇む風太郎。

食卓の上に残る、ケーキの大皿、三人分のバラバラのカップ、クリームのついたフォーク・・・。

窓からは、街の明かりが淡く射している。

部屋にさがり、静けさの中、風太郎は、食卓を片付ける。

ふとその手をとめ、机の上の猫のぬいぐるみを見る。

手にとり、きちんと座らせる。

猫の顔を見る。少し笑顔になる。

窓の外の雨を、ゆっくりと見上げる風太郎。

横顔の微笑みには、ささやかな、しかし確かな希望の色がある。

空は、晴れず。虹が出ることもなく、冷たい雨は、終わることなく降り続ける。

だが、静かに耳を澄ましてみると、雨の音は、まるで拍手のようにも聞こえてくるのだ。

（おわり）

【上演時間*約七十分】

第15回日本劇作家協会新人戯曲賞 入賞作品

<上演記録>

初演：2008年12月 @アトリエ春風舎 青☆組 vol.9

再演：2011年1月 @アトリエ春風舎 青☆組 vol.14

再演：2017年5~6月 @アトリエ春風舎 青☆組 vol.23

●2017年 印刷版●

※本作は、『優秀新人戯曲集 2010』収録の初演上演台本とほぼ同じですが、2011年の再演を経て、一部のト書きや台詞について、若干の加筆修正、カット等を加えた、最新版の上演台本となります。

著者：吉田小夏

- * 本作品の上演をご希望の方は、青☆組へお問い合わせください。
- * 乱丁・落丁などございました際には、お手数ですが下記にお問い合わせくださいませ。

<お問い合わせ>

e-mail：office@aogumi.org

青☆組 HP：www.aogumi.org